

淡路島北西部の北淡地区に多様な体験型施設や飲食店等を面的に整備し（図1）、「淡路島西海岸」としてブランド化を推進。国内外から多くの観光客を誘致することで、地域の持続的な活性化に大きく寄与している。

（1）パソナグループの企業理念

パソナグループは「社会の問題点を解決する」という企業理念のもと、「人を生かす」ことを事業の根幹、および果たすべき社会的責任（CSR）と捉えている。誰もが自由に好きな仕事を選択し、働く機会を得られる社会の実現を目指して、多様な社会インフラを構築。人々の心豊かな生活を創造する「ライフプロデュース」に取り組んでいる。

（2）淡路島への本社主要機能の一部移転

パソナグループは2020年9月、「真に豊かな生き方・働き方の実現」、「東京一極集中の是正と地方創生」、および「事業継続計画（BCP）対策」を目的に、本社主要機能の一部を淡路島へ段階的に移転することを発表した。

この移転に伴い、島内には複数の新オフィスに加え、都心とは異なる「職住近接」や「新たなコミュニティ形成」を可能にする多様な社宅・社員寮が整備され、社員が安心して生活できる基盤が構築されている。

2025年5月時点での淡路島への移転人数は約1,300名、島内勤務者数は約2,000名に達した。この大規模な人材移動は地域にも大きな影響を与え

ており、淡路市全体で転入超過（社会増）が継続する要因となっている（図2）。移住した社員や家族による消費活動、島内での新ビジネス創出、さらにU・Iターン希望者の増加など、多角的な側面から地域経済の活性化に貢献している

（3）淡路島での取り組み

①農業分野（パソナチャレンジファームin淡路）

あわじ環境未来島特区の「食と農の持続」におけるプロジェクトとして、2008年より「パソナチャレンジファームin淡路」を実施している。これは遊休農地や耕作放棄地の再生・利用を通じた農業ベンチャー支援制度である。

このプロジェクトの推進主体である株式会社パソナ農援隊は、「第一次産業が抱える担い手不足や技術継承、経営難などの課題解決」および「雇用創造と振興による地域活性化」をビジョンに掲げ、多様な取り組みを実践している。

同社は、農業起業を目指す人材を最長3年間、契約社員として雇用。自社農場での生産・加工・販売までを一貫して行う実践型研修を通じて、経営感覚を磨きながら独立を支援している。

また、循環型社会の実現を目的とした「タネノチカラ」プロジェクトも展開している。耕作放棄地を開墾し、豊かな土壌を創るユニークな体験プログラムや食や農をテーマに、日常生活で“アタリマエ”と感じていることを問い直し、参加者に新しい気づきや視点を与えるきっかけを提供している。

さらに国家戦略特区の一環として導入された特例を活用し、「農家レストラン 陽・燦燦^{はるさんさん}」を建設。周辺の畑で収穫された野菜を中心に、淡路島産の旬の食材を提供している（写真1）。

加えて、“農ある暮らし”をコンセプトにした宿泊施設「はたけのリゾート 燦燦Villa」も展開（写真2）。農業体験を通じた心身のリフレッシュやウェルビーイングな体験を提供することで、農業関係人口の増加と地域農業のさらなる活性化を目指している。



図2 淡路市の人口、社会増減推移

（出典：兵庫県推計人口データから作成）



写真1 農家レストラン 陽・燦燦



写真2 はたけのリゾート 燦燦Villa

②のじまスコラ（廃校活用による地域活性化モデル）

パソナグループは、少子化の影響により2010年に廃校となった旧淡路市立野島小学校の有効活用と、地域の雇用創出・活性化を目指す淡路市の「旧野島小学校施設用地利活用事業」に採択された。校舎をリノベーションし、2012年8月に複合施設「のじまスコラ」をオープンした（写真3）。

同施設は、地域住民との交流や情報発信の拠点としての役割を担うとともに、運営を通じて新た



写真3 のじまスコラ外観

な雇用を創出。2012年の開設以来、廃校活用の先駆的な成功モデルとして全国から注目を集め続けている。

③兵庫県立淡路島公園アニメパーク「ニジゲンノモリ」（自然×アニメ・ゲームの体験型パーク）

アニメパーク「ニジゲンノモリ」は、2013年に兵庫県が公募した「県立淡路島公園における民間事業の企画提案」に、パソナグループの「淡路マンガ・アニメアイランド事業」が採用されたことで誕生し、2017年7月にオープンした。

同施設は、広大な自然と二次元コンテンツ、そしてメディアアートをはじめとする最新テクノロジーの融合が特徴である。日本の人気漫画、アニメ、ゲームの世界観を五感で体験できる新感覚のエンターテインメント施設として、国内外から高い注目を集めている。

主なアトラクションには、「ゴジラ迎撃作戦（写真4）」、「クレヨンしんちゃんアドベンチャーパーク」、「NARUTO&BORUTO 忍里」、「ドラゴンクエスト アイランド」などがある。



写真4 ゴジラ進撃作戦
（出典：ニジゲンノモリHP）

④クラフトサーカス

クラフトサーカスは、播磨灘の美しい海と夕陽を一望できるシーサイドレストラン&マーケットである。「日本の夕陽百選」にも選ばれた絶景スポットに位置し、爽やかな海風を感じながら食事やショッピングを楽しめるリゾート空間として人気を集めている（写真5）。

同施設は、淡路島の多彩な魅力を島内外へ発信し、多くの観光客を誘致することで、西海岸エリアの活性化に大きく寄与している。また、施設運営を通じて新たな雇用を創出するなど、地域経済の持続的な発展にも貢献している。



写真5 クラフトサーカス外観

淡路島の四季折々の景色を360度に堪能できるように設計されている。都会の喧騒から離れて心身を整えることを主目的としつつ、日本の伝統文化である「禅」の価値を再発見し、国内外に発信することを目指している。

提供されるプランの一つとして、日帰りで楽しめる「ZEN Wellness Plan」がある。このプランでは、禅、ヨガ、呼吸法などのアクティビティを通じて、ウェルビーイングな体験を提供している（写真6）。



写真6 禅坊 靖寧外観

⑤青海波

2020年8月、淡路島西海岸の景勝地にオープンした「青海波」は、食と芸術が融合した贅沢な大人のための複合施設である。落ち着いた和の佇まいの館内は、劇場「波乗亭」、和食レストラン「青の舎」、洋食レストラン「海の舎」の3施設で構成されている。

文化・芸術の発信拠点である劇場「波乗亭」では、日本の伝統芸能やオリジナル演目の公演を通じて、淡路島における新たな文化創造の役割を担っている。一方、レストラン事業では「御食国」として名高い淡路島の豊かな食材を積極的に活用。地産地消の推進とともに、地域の「食」の魅力を国内外へ発信している。

⑥禅坊 靖寧（心身を整える禅リトリート施設）

「禅坊 靖寧」は、禅やヨガを取り入れた禅リトリートを体験できる宿泊・日帰り複合施設として、2022年4月にオープンした。

東経135度の子午線上に位置するこの施設は、

⑦淡路シェフガーデン（独立を目指すシェフが集結）

「淡路シェフガーデン」は、パソナグループが淡路島西海岸で運営する、屋外型の集合レストラン施設である（写真7）。食材の宝庫として知られる淡路島の旬の食材を生かし、多彩なジャンルの料理を提供する新たな食の拠点として注目を集めている。

本施設は、新型コロナウイルス感染症の影響で営業縮小や閉店を余儀なくされた全国のシェフ、および独立を目指す若手料理人へ「再挑戦と活躍



写真7 淡路シェフガーデン外観

（出典：パソナグループHP）

の場」を提供するために企画された。2021年4月に淡路島東海岸で営業を開始し、その後2023年4月、「日本の夕陽百選」に選ばれた播磨灘の絶景を臨む西海岸エリアへと移転・リニューアルオープンを果たした。

コロナ禍で困難に直面した料理人への支援という社会貢献に加え、観光客に新たな食体験を提供するこの取り組みは、地方創生の成功モデルとして高く評価されている。

3. 中山間地域への展開に向けて

パソナグループの淡路島における取り組みは、創業者である南部靖之氏の「東京一極集中のリスクを分散し、真に豊かな生き方・働き方を実現したい」という強い信念から生まれたものである。その原点には、1995年の阪神・淡路大震災において「人が活躍できる場を創出することこそが地域振興と社会課題解決につながる」と確信した経験があり、これが同社の地方創生事業を加速させる契機となった。

同社が農業分野へ参入した背景には、二つの社会課題の同時解決がある。南部氏は地方視察を通じて、基幹産業である農業が深刻な高齢化と後継者不足に直面している現状を目の当たりにした。同時に、都市部ではITバブル崩壊後の失業率増加という課題が顕在化していた。そこで、「地方農業の担い手不足」と「都市部の余剰人員」をマッチングさせる解決策として、農業に着目したのである。

同社の手法は、「人材育成」、「新産業創出」、「都市部からの積極的な人材誘致（関係人口・移住者の創出）」を組み合わせた包括的なアプローチが特徴である。これは、人口流出や高齢化に悩む地方自治体に対し、具体的な解決策を提示するモデルケースと言える。

一方で、多くの中山間地域が抱える「都市部からのアクセスの悪さ」という根本的な課題は無視できず、交通の不便さは、観光客誘致や移住促進の大きな障壁となる。淡路島は明石海峡大橋の開

通以来、神戸・大阪といった大都市圏からのアクセスが良いという地理的優位性を持っている。中山間地域では、インフラ整備や地域独自の二次交通の確保が不可欠であり、パソナグループの淡路島モデルをそのまま水平展開するには地域ごとの特性に合わせた工夫が必要である。

したがって、中山間地域における地方創生・地域振興のポイントは、森林、清流、農業、伝統文化といった「地域特有の資源」を生かした体験型観光や研修プログラムの開発に活路を見出すべきではないかと考える。その点において、「タネノチカラ」プロジェクトで展開されている、耕作放棄地を開墾し豊かな土壌を創り出すユニークな体験プログラムは、中山間地域の資源活用を考える上でも非常に示唆に富む取り組みである。

研究会では、今後、中山間地域の持続可能な発展に向けた企業の役割や自治体との連携を研究成果として取りまとめることとしており、今回の視察詳細や得られた知見についても報告書の中に織り込む予定である。

以上